

阿蘇神社の二つの役割

噴火を防ぎ収穫を応援する

阿蘇神社で行われる儀式や祭礼には二つの明確な役割があります：一つ目は阿蘇山の噴火を防ぐこと、二つ目は豊穡を確保することです。

まず、火山噴火の防止についてみてみましょう。毎年6月上旬、阿蘇神社の神職たちは「火口鎮祭」を執り行います。神職たちは一番大きな火口の縁に近づき、祝詞を唱え、ジグザグに切られた白い紙の垂れ飾りがついた棒三本を火口に投げ入れます（これら三本の棒は、この火山の主要な三神である健甕龍命、その妻阿蘇都比咩命、そして彼らの孫の彦御子神に捧げるものです。）

火山の噴火よりも収穫の時期の方が定期的に訪れるため、神社では火口の鎮静化よりも米作りに関連した儀式や祭りを数多く行っています。これらの儀式や祭りは季節のサイクルにあわせて行われます。春は田植えの時期。夏は稲が育つ時期ですが、多すぎたり少なすぎたりする雨量や猛暑、虫害に見舞われやすい時期でもあります。秋は収穫を迎え、豊穡をもたらした神々が感謝される時期です。（日本の祭りのほとんどが秋に行われるのはこのためです）。

このサイクルに続き、阿蘇神社では3月に、茅でできた松明を振り回して、この神社の十二祭神に数えられる国龍命と、阿蘇の別の神社から持ってこられたご神木の枝として表されたその妻との結婚を祝う「火振り神事」が行われます。二神の婚姻は豊穡をもたらすとされています。

7月末に行われるおんだ祭りの目的も同様で、豊穡を祈願することです。この時期にはすでに稲が成長しているため、地元の人々は神社の祭神たちを4基の神輿に乗せ、約5kmにわたって田んぼを見てまわります。神輿には、馬に乗った神職たちが続きます。顔を隠し頭から足まで白装束に身を包んだ「宇奈利」と呼ばれる14人の女性たちは頭上に神々へ捧げる食物を運びます。その後ろは、男・女・雄牛の頭の人形を乗せた棒を持った三人の村の少年たちです；この三人形は一式で労働生産の力を表現します。観客は神輿に稲穂を投げつけます；稲穂が神輿の屋根にたくさんつくほど豊作となります。

9月下旬には、米の収穫に感謝を捧げる「田実祭（田の実りの祭り）」が行われます。下宮の参道では流鏝馬が奉納されます。カルデラにある阿蘇神社の分社ではそれぞれ、強風や霜を防ぐなど非常に具体的な農業に関する目的に沿った独自の小さな祭りが行われます。

その文化的重要性を認められ、阿蘇の農耕祭事は1982年に文化庁から重要無形民俗文化財に指定されました。